

南の島の楽園生活マガジン

エムック1033

# 沖縄スタイル

[magazine]

OkinawaStyle 07

<http://www.okinawa-style.jp>

「沖縄いいもの  
通販カタログ」  
付き

特集



## 移住歴3年未満 沖縄の暮らし

第2特集

## 沖縄ビーチ徹底研究

本誌厳選イチャンダビーチ  
ビーチサイドの穴場な宿  
達人が教えるビーチ遊び  
海辺のカフェ他

あんまーの台所

# 沖縄県

# 平和祈念資料館

写真・文 福村俊治  
Photos & Text : Shunji Fukumura

本当にいい建築は、その建物が立つ場所の風土、歴史、生活様式を表現している。沖縄でいいといわれる建築もその例に漏れない。中でも、沖縄県平和祈念資料館はそれらの条件すべてを備えたものだ。この建築を見ていくと、沖縄とはどんな場所なのか自然と見えてくる。

6月の下旬、日本本土が梅雨に入るとき、沖縄では梅雨が明け、雲一つない青い空と刺すような強い日差しが真夏となる。そして、「鉄の暴風」と呼ばれた沖縄戦が終わった「6月23日」が毎年やってくる。その悲惨を極めた沖縄戦を忘れず、世界の恒久平和を希求し、戦没者の霊を慰めるため、この日を「慰霊の日」と定め、多くの沖縄の人々が沖縄戦

終焉の地、糸満市摩文仁に集まり、沖縄県主催の慰霊祭が行われる。60年前の1945年4月1日に米軍は沖縄本島に上陸、この糸満摩文仁で組織的な戦いが終わるまでのたった3カ月間で、日本軍人約9万5000人、米軍約1万3000人、そして、沖縄の子供や老人を含む民間人約10万人の命が失われた。当時の沖縄県民の4人に1人がこの戦い

国内外を問わず沖縄戦で亡くなった24万人の名前が刻銘された、平和の礎と、それを取り囲むように配置され、普通の沖縄の集落に似た外観を持つ沖縄県平和祈念資料館



平和祈念資料館は、平和の火を中心とした同心円状の建物で長さ220m、さまざまな形の異なる125の赤瓦屋根を持つ



# ARCHITECTURE

沖縄建築

OKINAWA ARCHITECTURE

File ①

## 「平和の礎」には「平和の波 永遠なれ」との願いが込められている

右：平和の礎・慰霊の広場・平和祈念資料館のある糸満市摩文仁の平和祈念公園は、沖縄戦最終焉の地である。激戦の末、追い詰められた多くの住民はこの断崖から飛び降りた 上：建物前面の柱廊とホールの中庭。水路・ヒンプン・石積井戸・石や赤瓦敷の床・沖縄の植栽など、細かな沖縄の建築要素が集められている



かつての焼け野原だった所に近代的な都市が生まれ、その後も緑の丘陵地は削られ、青い海と白い砂浜は埋め立てられ都市化が進んでいる。皮肉なことに、いまや緑と広大なオープンスペースなどが残るのは米軍基地内だけになりつつある。

現在、年間500万人の人々が、日本で唯一の亜熱帯で青い海を持つ沖縄に観光で訪れる。60年前、この沖縄の地で、米軍と日本軍が住民を巻き込んで熾烈な戦いがあったことを現在の沖縄から知る由もない。悲惨な沖縄戦の記憶も風化しつつある。確かに各地に多くの慰霊碑があるが、これらは戦争経験者にとって戦争の悲しさを思い起こさせ平和の大切さを感じさせるものであつて

も、戦争を知らない若い世代に戦争の悲惨さを伝えるには十分ではない。戦争を体験した人々も高齢になり、今、しっかりと沖縄戦の経緯を未来を担う若者達に伝えなければならぬ。

1995年沖縄戦終結50年の節目に、国内外を問わずこの沖縄戦で亡くなった約24万人の人々の名を刻銘した「平和の礎」が造られた。中心には「平和の火」があり、同心円状に亡くなった人々の名前が刻銘された碑が屏風状に配置されている。中心の火から「平和の波 永遠なれ」と、沖縄から波に乗って世界に向けて永遠の平和の心を発信し続けようとするものである。

1975年に建設された旧平和祈念資料館は、住民の視点から戦争の非人間性と残忍性を告発した画期的な施設として高く評価された。しかし、旧資料館は約1000平方メートルと施設の規模も小さく、沖縄戦のすべてを展示することができず、平和事業活動も十分にできないなど、施設の狭隘・老朽化により、新しく移転建築することとなった。そして、1996年に新平和祈念資料館の設計プロポーザル・エスキス競技(審査委員長・清家清・元東京芸術大学教授)で、私達チーム・ドリームの案が最優秀案に選ばれた。

私達はこの建物の案を考えるに当たって、次のように考えた。国定戦跡公園の中の景勝地の一角にある建

で命を失い、貴重な文化財の他、人々が住む街や住宅など、形あるすべてものがこの沖縄戦で失われた。

占領後、アメリカは巨大な米軍基地を数多く沖縄に造った。それらは、沖縄本島の面積の約20割(224平方キロ)を占め、国土の0.6割の沖縄の地に、日本にある米軍基地の75割が集中する現実は60年たった現在でもほとんど変わらない。米軍支配は日本復帰(1972年)まで27年間続いた。復帰後は、日本本土との格差是正の名の下、現在まで5兆円を超える資金が日本政府から投入され、地域振興や社会整備が行われた。

右：平和祈念資料館の背面側の出入り口、ここから人々は細い水路のある軸線に導かれ、平和の礎の中心にある平和の火の方向へ向かう。その後方には太平洋を望む 下：平和の礎のメイン園路、この軸線は沖縄戦が終わった6月23日の日の出の方向に合わせてある。平和の火と慰霊広場を結ぶ主軸でもある





赤瓦屋根とモダンな内部は  
沖縄の伝統文化と将来の夢を  
同時に感じさせる

内部は

大城清隆	大城マフ	大城新之	大城一太郎	大城山良忠	大城行雄	大城信三	大城アツ	大城武	大城原	大城ハツ
大城宗隆	大城由紀子	大城三郎	大城秀子	大城山良忠	大城信三	大城アツ	大城武	大城原	大城ハツ	大城三郎
大城文子	大城三郎	大城秀子	大城一太郎	大城山良忠	大城信三	大城アツ	大城武	大城原	大城ハツ	大城三郎
大城由紀子	大城三郎	大城秀子	大城一太郎	大城山良忠	大城信三	大城アツ	大城武	大城原	大城ハツ	大城三郎
大城文子	大城三郎	大城秀子	大城一太郎	大城山良忠	大城信三	大城アツ	大城武	大城原	大城ハツ	大城三郎



6月23日の「慰霊の日」には、多くの人々が平和の礎を訪れる。礎に刻された身内の名前の中で戦没者を追悼し、沖縄戦の教訓を噛み締め、恒久平和を祈る。



右:湾曲した吹き抜けと列柱のあるメインホール。平和祈念公園全体の休憩の場でもある上:ホールは大きなガラス開口によって中庭・柱廊・平和の礎に連続している。建物が同心円状であるため、建物のどこに立っても平和の火の中心軸に立つことになる。

設予定地は沖縄戦終焉の地であり、しかも「平和の礎」のすぐ横に位置し、沖縄にとつて大きな重責を負うこの建物の表現は、もはや設計者個人による建築的なデザインでは許されないこと。そして同時に、戦前から現在までの沖縄の移り変わりとし、沖縄が長年培ってきた建築文化を踏まえながら、沖縄の将来の夢や希望を希求する心を建物に表現しなければならぬ。つまり、「平和を形にする」ことが設計のポイントであると考へた。

具体的には、主である「平和の礎」に寄り添うよう平和の火を中心とした同心円状に建物を配置し、かつての沖縄の伝統的な集落の風景を思わせるような数多くの赤瓦屋根を載せた。これらの赤瓦屋根は沖縄の気候風土の中では、周辺の風景に溶け込み、地元の人々にとっては、郷愁を感じる「ウチナー（沖縄）の様相」であり、一方、地元以外の人々にとっては文化や歴史の異なる沖縄の建築文化や風景を強く意識させるもの

とした。そして、建物前面の長い柱廊やヒンヤリな敷石や植栽のある中庭、エントランスホール前の広いピロティや石畳のスロープなど、かつての沖縄建築を新しい形で再現することによって、自己主張がちな建物の個性を消すように心がけた。

また、内部1階は外観とは対照的にモダンなものとし、モノトーンの高い吹き抜けと列柱を持つ湾曲した長いホールの他、多目的ホール・子供展示・情報ライブラリー・企画展示の諸室が並ぶ。2階には、住民を巻き込んだ沖縄戦の実相と悲惨さが克明に展示された常設展示室がある。そして、次の「海と礎の回廊」という沖縄の青く大きな海と空に開かれた部屋では、子供達に平和の大切さや沖縄の将来の夢を感じさせる空間となつている。展望塔からは摩文仁の平和祈念公園全体と太平洋が一望でき、常設展示室で見た激戦地の摩文仁の姿と現在の姿を重ねると同時に、若者の将来の夢を世界へ広げる場である。

この平和祈念資料館の建設に携わった関係者は、言葉だけでは言い表せない「ある使命感」を持ってそれぞれの仕事に携わった。なぜなら建設現場に隣接する「平和の礎」には身内の誰かの名前が刻かかれているからであり、親や年寄りから沖縄戦の悲惨さを聞かされていたからだ。沖縄戦の実相と悲惨さを伝えるための平和祈念資料館建設であつたと同時に、一人ひとりとしては「平和を形にする」作業であつたといつても過言ではない。この資料館の赤瓦屋根・外壁・内部の床・壁・天井など、細部にわたつて、「その心」が込められている。

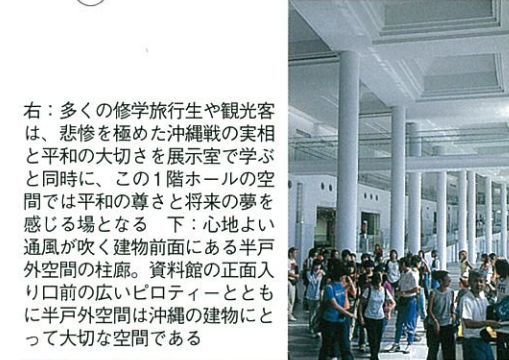
1階のホールの琉球松の大きな一枚板のベンチは、沖縄の戦前・戦後を生き抜いた大木でした。その一つのベンチには、沖縄戦の実弾の破片が今なお埋まつていることも伝えておきたい。

参考資料  
『平和を形にする』沖縄建設新聞社刊  
『平和の心を世界へ』シネマ沖縄

ARCHITECTURE

沖縄建築  
OKINAWA ARCHITECTURE  
File①

右:多くの修学旅行生や観光客は、悲惨を極めた沖縄戦の実相と平和の大切さを展示室で学ぶと同時に、この1階ホール空間では平和の尊さと将来の夢を感じる場となる。下:心地よい通風が吹く建物前面にある半戸外空間の柱廊。資料館の正面入り口前の広いピロティへと通つて半戸外空間は沖縄の建物にとつて大切な空間である。



ふくむらしゅんじ  
1953年滋賀県生まれ。関西大学建築学科大学院修了。原広司+アトリエファ建築研究所に勤務後、1990年に空間計画VOYAGER、1997年にteam DREAMを設立。沖縄県平和祈念資料館、沖縄県総合福祉センターなどを手がける。  
HP / http://www.dream-archi.com